

西脇順三郎コレクション

第II卷

詩集
2

全卷編集

新倉俊一

第三の神話

I

猪	4
十月	5
正月三田	7
デッサン	8
雪の日	21
六月の朝	25
旅の一日	28
二人は歩いた	28
元旦	31

	II		
神話	弓	春の日	34
68	66	自伝	36
		しゅんらん	38
		あかざ	42
		茶色の旅行	44
		夏の日	47
		内海	48
		はるののげし	50
		プレリユード	51
		呪文	56
		人間の没落について	57
		より巧みなる者へ	60

失われた時

IV	III	II	I
174	156	117	99

第三の神話	83
ジューピテル	78
スカーフ	77
蘭	75
阿修羅王のために	72

豊饒の女神

どこかで	195
大和路	196
女の野原	198
季節の言葉	200
二月	201
豊饒の女神	207
薔薇	210
この庭へ	212
鶯	212
黄金の毛抜き	214
あざみの衣	216
桃	218

九月
220

最終講義
227

えてるにたす

菜園の妖術
241

音
278

えてるにたす
288

寶石の眠り

コップの黄昏
317

雲のふるさと	364
バーの瞑想	362
崖の午後	359
エピック	352
すもも	349
記憶のために	347
まさかり	346
坂	344
茄子	343
きこり	342
椀	339
くるみの木	338
写真	336
ローマの休日	328
イタリア紀行	325
イタリア	322

宝石の眠り 365

解説（藤富保男） 367

回想の西脇順三郎（池田満寿夫）

377

初出一覧 381

後記 387

第三の神話

猪

タビラコというのはギリシャ語ではなく大原の女のなまりだ。

タビラコは巡礼は小便を避くべきだ。

タビラコは女と飲む心の酒杯で

この聖杯をさがしに坂をのぼつた時はもう暗かつた牧歌のような門をくぐり

石垣を上つて山腹の庭へ出てみた。

山茶花の大木が曲つていた

花が咲いていてこわかつた

ペルシャ人のような帽子をかぶつて

黒いタビラコのような鬚をはやした

男がこの庭を造つたのだゴトン
紫陽花のしげみから水車の女神が
石をたたいて猪を追う音がする。

十月

二十年ほど前は
まだコンクリートの堤防
を作らない人間がいた。
あのすさんだかたまつたシャヴァンヌの風景があつた。
ス、キの藪の中に
キチガイ茄子のぶらさがる
あの多摩川のへりでくずれかけた
曲つた畑に

梨と葡萄を作っている男

の家に遊びに行つた。

地蜂の巣をとり

牛肉を棒の先につけて

イモ畑をかけ出した

あの叙事詩。

十月の末のころでその男の縁側で

すばらしい第三の男にあつたのだ。

彼は毎日肩の破れたシャツをきて

投網で魚をとるのだがその

顔はメディチのロレンゾの死面だ。

すばらしい灰色の漆喰である。

彼は柿を調布のくず屋から買つてきた

剃刀でむいてたべた。

終りは困難である。

登戸のケヤキが見えなくなるまで

畑の中で

将棋をさして来た。

正月三田

眼だけ残っている。

考えることも感じたりすることも

危険な海の限界線である。

友人からもらった梅に白い花が

咲きかけたこの暗い室で。

この山の上で人生を終ることは

情ないことだがしかたがない。

菜根譚ももう僕には必要がない。

三田の崖に枸杞が栄えている。

あのほそながい赤い実は酒をくもらす。

年中その葉をサラダにして口をまげて
たべているだけだ。

焼けあとにとりのこされた樫の木は

豎琴のように枝をまげている。

でもあの木だけは切らないで下さい。

秋になつたら芝生にオギヨーという草

が一面に小さい頭を出して来た

これも刈らないで下さいな。

これは春の七草の一つだ

うない乙女の籠を飾るのだから。

デッサン

初めもない終りもない世界に

とりくむことはほねが折れる
どうして始めるかわからない。

或る漁夫に頼まれて

エビをとる機械を発明すること
を考えながら旅をして来た。

錯覚のエビは口紅水仙のように
女のようにつきまとうのだ。

近代的英雄はイモ畑を走るだけだ。
旅からもどつてノートを整理する
ことは実にいやな角度と色彩を
もっていると思う。

さんたんたる時間の昏迷だ。

ヤツデは寒さで萎れていた。

イボタの木は雪でまがり

トベラの木は真中から折れていた。
写楽の江戸兵衛が出て来そうな

天気だがしばらくヒヨドリが

南天の実を啄むのを見ながら

生命のドン底へおちていくのを

待っているのだ。

生命の発生の仕事は生物の時間の

初めであつて終りである。

その中間はたのしみであつて実際の

苦痛でもあつてベルグソンのエラン

ヴィタルというかすかな光りであつて

鉱物ならウラニウムウラニウムの悲しみである。

このとりくずされたノートは藪にからむ

灰色のつる草の言葉であると思う。

人間に関する神話は植物性の中へ進化

して来た。

神農のドロ人形のようにおちついて

いる世界をあこがれる人間がいる。

夜木星の光りでホウコグサを摘む

男のために花言葉をきかせる。

黄色い薔薇は愛の減少だ

そこには先見と予言しかない

イチゴの花とタンポポしか言葉をもつて
いないが、悲しい思い出のアドーニス

は人間の最大なアポカリプスだ。

人間の考えはまたアポコペといつて語尾
の省略でもある。

猿から福寿草へ発展する間に人間が
しやべつているだけだ。

「わたしはあの男がすぎた。わたしは
いつもあの男の子をうみたいと思つた」
とある女が話をしていた。

ノートは時間の昏迷を避けることが
出来ない全く化石になつてしまつた。

春の次に冬が来たり、春がつづいてまた
春になることもある。

或る日はアンズの花の枝と

アネモネの束をもつて歩いた。

或る男は痴鈍な柔い深みのある

山男の声をもつていたそれは或る

やさしい、はるかな威厳のある様子で

ものをしやべつたのだ。この男は

私の睡眠の中にだけ出て来る男で

あるが口をまげて笑うのだ。

春になるとクルミや葡萄酒や一本の

パイプや橋のある風景と共にこの男が夢に出てくる。

この秋はサンザシの実が沢山とれたの

で伝説にしたがつてこの冬は特に寒いだらう。

牧笛であろうがタテゴトであろうが

すべて音を出す品物は生命がない

そのうしろに人間がいるからである。

おぼえているのは堰の下で二人の

釣り人が鱸の類をつつていたが

その人間とは話をしなかつた。

会いに行く人は川の向うの水車屋に住んでいた、せまいまるたぼうの橋を渡つて行かなければならない。

その時は林檎がまだ堅いみどりの果実でゼンヌの林檎だと思つた。

この男はベイコンの若い時のようにやせて青白くみえた。

彼は女のようにアツパツパみたいなものを着て死の神のように長いハサミをもつて立つていた。

よくみるとその男は昨夜

地獄へ行つてしまつたのだ。

人間の心をうつ尊厳の最大なものだ。

ノートはますます混乱している。

もうアレゴリアは許されない。

なぜこのノートはウルトラマリーン色になつて来たのか。死はテラコタの人形

となつて最大に美しいものだ。

ただこの山にみるべきものは

トベラの木が雪のために折れて

白い身を出している事実だけだ。

秋のタンポポはセージ色の茎をのばして

毛の球を失つていることなどは

あまりに宗教的である。

地平線に女が立つている

地平線は極まりなくつづいてる。

この限らない幻想は生物的な殆ど

物理的な放射線であつてここに

すべての生物の発生条件がある。

これが本当のエラン・ヴィタルだ。

形而上学的生物学は論理的な

数学的な進化論に終る

オーギュールピテル

考えることのない世界に踏み迷う

ことは実にくるしいことだ。

まだ二千キロ歩かなければならないのだ。

神の世界と人間の世界とを結びつけた

あのフィレンツェの伊太利人のことを想う。

変化しないことは永遠に変化すること

であるがこれはパラドックスである

しかしそれは永遠のパラドックスである。

生物はなぜ繁殖しなければならぬのか。

私がこういうことを考える時は考える

ことがない時であるに違いない。

もう都の坂へ帰りたくなつた。

深夜の百姓の道にはホウコグサが

出ているだろうが、籠をもつて摘み

に行くといふが、連れて行く女の子がいない。

ムサシノではまだ桜が咲いていないな。

ただ脳髓の波動が溺れようとしている。

始める必要も終る必要もない

世界を作ろうとしてもがいている。

三月にでもなつたらあの岩の中を

とおる路へ出て野生の桜の中を

花が咲いているのが見れる。

ユガシマの宿で忘れていたことは

あの植木屋のせがれがフラジオレットを

吹いていたことだ

あゝこれはまた意識の流れというやつ

になつて実にこまつたものだ。

君は一体何を考えようとするのだ。

何ものをも考えないようにすることも

考えていることだ

そうなると生垣によりかゝつて

考えつづけるほかないのだ

考えないように考えるところは

眼で見ないように見ることだ

節分がすむとまた出かけるのだ

また生きて二度死ぬことだ

あのハリツケのスペンディウスのように
なんともいえないにがい顔をするのだ
フロスキ包みと杖を石垣の上に置いて

馬小屋の中をのぞくのだ

そこからわれわれの世紀が始まるのだ

古い徳利の中に新しい酒をつぐのだ

新しい旅は古い旅の中に旅をするから

新しい旅ということになる

自分と土を分解すると分離すること

の出来ない存在がある

われわれは暗いところを歩いて来た

百姓の窓にあかりがついていた

藁のにおいがして石油の香りがする

犬が吠える雪の上に桜の木の影が

うつるのでそれが動物には恐ろしいものと

なるからであろうが、犬の脳髓の活動は人間のそれとどんな風に違うものか。

生物の根本的な客観的な存在は実存の発生である

こういうように考える形式は考えないための考え方である。

あの漁村に住み始めたのは小説を書くためであつたが

前にもいつたようにエビをとる機械を発明することを頼まれてしまった。

ねずみ取りのようなシカケでブリキで作つて成功したが

資本家を発見することが出来なかつた。

これはみな土の現象ではない土と全く関係のない人間の話だ。

このイボタの木になつているこの黒い実の中に女の視界が

展開されている

女と百姓に話すほかない

人間の言葉なども始めは女の

発明であつた

小鳥の秘密だけにみよかたむけるのだ

あの地平線にさまよう女の言葉などは

夕暮の会話としては

銀のコップのようにくもつている。

人間の終りではつまらないものほど

リリカであると思う

「近所に果物屋がなくて実に

こまる」などは夕霧のように

リリカである

来るともなしに来た女などは

無常を感じさせるほど美しい

淋しみのないところに淋しみを

感じる時はすべての始めである

グロテスクに美を感じる正直者は
「光」のタバコの箱のあの色に
無常を感じる人と等しく偉大だ。
あとともういうことがない
夕暮に坂をのぼる
錯視にのみ生きられる
錯視は実存の実体である
生物はみな斜視で
人間も二つの平行線がひけない。
犬の眼は正確だから
すべて灰色にみえるのだ。
人間の眼も写真のように黒白に
しかみえないといふが。
黒白はただ光りの歴史にすぎない
から実にいふ。
人間の没落は色彩がみえる
からだ。

「私はアミモノをしながら静かに
ため息する——それは女の伝統だ」
とあるチューバキュロシスをわずらつてい
る女のひとが手紙に書いたことだ。
荒れはてた大きい庭園を通りぬけた
ことがある
どこからともなく奥の方から林檎の
匂いがして来た。

雪の日

雪の降る日まして
日曜日のことで人出も少なからうと
思いかねてこの都へ御出での